

# カルチャーショック

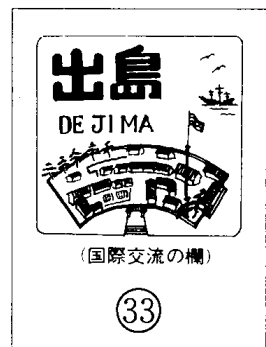
## アメリカ合衆国での医療経験

KANEMATSU TAKASHI  
兼松 隆之

がんの告知率は約20年前には洋の東西で大きな差があった。最近の我が国におけるがん告知に関するアンケート結果では患者側はがんが早期、進行期のいずれであっても告知を望むものが86%、71%であるのに対し、告知に賛成する医師は早期がんの場合67%、進行がんの場合16%と報告されている。この数値については種々の見解があるだろうが、我が国においてもがんの告知率が高まっていることは間違いない。一方、米国では1960年代のがん告知率は10数%であったにもかかわらず、1971年の統計では91%、1979年には98%との報告をみる。

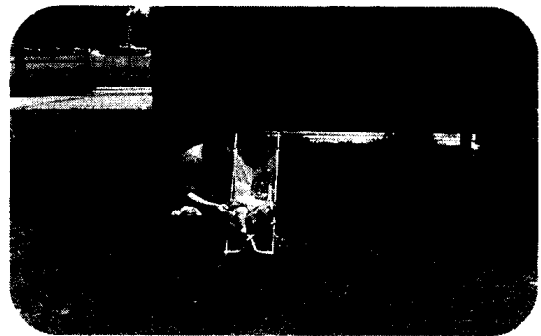
私は1970年代の終り頃、米国ノース・カロライナ州ニューハノーバー病院で外科病棟に勤務した。その際、忘れられない出来事があった。私は乳癌のために手術を行った中年の女性を担当した。術後、放射線療法や制癌剤による化学療法などの追加が必要か否かは、切除標本を検索した上でリンパ節にがんの転移の有無で決定することになっていた。すなわち、リンパ節にがん転移があると病気がかなり進行しているものと判断され、上記治療がなされることになるわけである。その判定が下される日、私が彼女の病室を訪れると、私の指導医がすでに彼女の所に来て結果を告げて帰ったところであった。私は彼女に「それで結果はどうでした？」と尋ねた。彼女は微笑みながら答えてくれたが、私はその意味が充分理解できていなかったがその時の彼女の雰囲気からしてリンパ節へのがん転移はなかったものと思い込んで「それはよかったですね。おめでとう。」と私は述べた。すると彼女はいたずらっぽくそして半分怒ったような口調を作って「あなたは何てひどいことをいうの。先生はリンパ節にがんの転移があったから、明日、化学療法の専門医に来てもらいますのでよく相談して下さいといっていたわ」と詳しく説明してくれた。私は当時、医学部卒業7年目で日本での臨床経験もそれなりにあったが、1970年代の日本ではがんの告知は一般的でなく、ましてや進行がんの告知の経験は皆無であった。そのような背景と英会話力の未熟さが招いたことであった。私は平謝りに謝ったが、彼女は私のことをよく理解してくれた。それからは、以前にも増して彼女の部屋を訪れ、家族

連載第5回



のこと、カレッジバスケットのことなどにも花が咲いた。

今では我が国でもがんの告知についても考え方が以前とは大きく異なり、積極的に行われるようになってきた。その論議を耳にする時、私は彼女のことを思い出す。あれから20年たらずの年月が過ぎた。米国東南部の田舎街で彼女が健やかでいてくれれば幸いである。  
(留学生指導主事・医学部教授)



ニューハノーバーメモリアル病院前にて

## 海外雑感

MORINAGA HARUNO  
森永 春乃

<その1>初めての海外渡航はもう25年前、南米であった。慢性のインフレ状態にもかかわらず、人々は陽気でワインを楽しみ、サッカーに興じ、道端の物乞いさえ、声高らかに歌って幾ばくかの金銭をねだった。働く人々は決して勤勉とはいえない。当時日本はまさに高度成長期の真只中、つい比較し、これじゃ当分経済発展は遅れるだろうなどと考えたりした。しかし何か魅力を感じるものがあった。日本人は“小人閑居して不善を為す”と云って働く事、勤勉であることを徳とし、働き続けて世界の経済大国となった。しかし人生を楽しむ術を天性の如く持つ南米の人々には負ける。はかり知れない魅力を感じたのはそこかもしれない。